

遊戯療法におけるスーパービジョン

酒 井 敦 子

Supervision in Play Therapy

Atsuko SAKAI

要 旨

遊戯療法におけるスーパービジョンは、他の心理療法におけるスーパービジョンと同様に大変重要である。ここに、遊戯療法の持つ意味についての確認、遊戯療法場面で起きているさまざまなことや疑問を通して、セラピストの役割、遊戯療法の本質について改めて考えてみることにする。また筆者自身が受けた遊戯療法の訓練やスーパービジョンを辿りつつ、これからのスーパービジョンのあり方について考察したい。

キーワード：遊戯療法・セラピストの態度・スーパービジョン・遊戯療法の
本質

I. はじめに

臨床心理士を志す学生たちは、いろいろな出自から来ていて、遊戯療法という言葉は聞いたことがあっても、その本質的な意味について、まだ学んでいな

いことも多く、根本的なことから着手しなければならないことに気がついた。

これを機会に、遊戯療法のもつ意味をもう一度確認し、遊戯療法の場面で、日ごろ直面した問題や考えたことのいくつかを提示し、これから臨床心理士になろうと励んでいる後輩たちに、遊戯療法の本質をどのように伝え、スーパーバイズすべきか等を考えたい。

II. 遊戯療法の持つ意味

遊戯療法に、普通、2つの流れがあるのは周知のことである。ひとつは、フロイトの末娘のアンナ・フロイト、メラニークライン、ウニコットの流れをくむ精神分析的アプローチと、もうひとつは、ロジャーズの流れをくむ、アックスライン、ムスターカス、ランドレスたちの来談者中心療法（パーソンセンタード、または、チャイルドセンタード）的アプローチである。（吉田・伊藤1997）

ここでは、各派の遊戯療法の要約、説明をすることが目的ではない。ここでは、筆者が直接辿ってきた（訓練を受けた）遊戯療法の持つ意味を確認したい。

心理療法や遊戯療法の基本となるものについて常に含蓄のある言葉で語り、執筆する村瀬は、『統合的心理療法』（村瀬2001）を提唱し、遊戯療法を次のように定義している。「遊戯療法とは、言語によっては十分に表現するに至らないクライアントを対象に、遊ぶことや遊具をとおして行われる心理療法であり、遊ぶことをとおしてクライアントの人格の成長と変容を目指す自発的創造的な活動である。」（村瀬1996）また「遊戯療法（プレイセラピー）とは遊びを主たる表現手段、コミュニケーションの表現手段とする心理療法を指している。」（村瀬2003）その根本思想は、クライアント「そのひとにとりあえず、存在をそのまま認めて、生きていくことを手助けする、支えになることは、どんな人にとっても害にならなくて、いいことではないか、支持というのはありとあらゆる心理療法の共通項としてある」（村瀬2000）また言葉の使用もままならない子どもを対象とする場合の多い遊戯療法においては、治療者自身子どもと共に成長したいと願っていることが大切である。現実と非現実の中間領域に身を

ゆだねて、なおかつ治療上半歩リードして、治療責任を担いうるには、治療者に絶妙なバランス感覚が求められることを強調している。

次に、遊戯療法の創始者とされている Axline は、名著、“Play Therapy”の中で次のように説明している。(Axline, 1947, 小林訳1968)「プレイセラピー」とは、「問題を持つ子どもが自分を援助するのを助ける方法」(A Method of Helping Problem Children Help Themselves)であると副題をつけている。また、遊戯療法とは、「成人向きの治療で、個人が自己の困難な事情を『話すことにより表出する』ように、自分の気持ちや問題を、子どもが『遊ぶことにより表出する』ために与えられているひとつの機会である。それは、非指示的療法 (non-directive therapy) というより自己指示的療法 (self-directive therapy) と言ってもよい方法である」と言及している。

Axline は遊戯療法について、「『もっともふさわしい条件のもとで子どもに成長を体験させるために与えられた機会である。』『あそびは子どもにとって自己表現の自然な媒体ですから、子どもの、蓄積された緊張感、欲求不満、不安定感、攻撃性、恐怖、当惑、混乱などをあそぶことによって、外部に表わしてもよい機会を子どもに与える。』こうしたき気持ちを、遊ぶことによって外部に表わしてはじめて、子どもは自分の気持ちを表面化して、あけすけにし、その気持ちに直面して、それを統御したり、それを捨てたりすることを学習するのです。子どもはくつろいだ気持ちになると、自分のうちにある、自らの権利でほんとうの自分になろうとするちからを実現し、自分で考え、自分で決定を下し、もっと心理的な成長を遂げ、個性を実現しはじめるのです。」と子どもがどのような状況のもとで心理的成長を成し遂げていくかを説いている。私たち成人が自分の内面世界（こころの世界）をことばで語ることによって自分の心の問題を解決していくのと同様の作業・こころの作業（酒井2005）がここ（遊戯療法場面）でおこなわれているといえる。これはフロイトが、自由連想法を用いて神経症の治療を始めたことと相通じるものである。

米国で、アックスライン、ムスターカスの流れを受け継ぐランドレスは、チャ

イルド・セントード・セラピーを提唱し、「子どもの自然なことばは遊びである。遊びは子どもにとってもっとも快く自己を表現できる手段である。」遊戯療法場面での遊びは子どもの言葉であり、玩具は単語に匹敵する。鳥は飛び、魚は泳ぎ、子どもは遊ぶごとくである」という。(Landreth, 1991a)

精神療法や心理療法の展開に、クライアントの主訴に窓論を展開し、心理臨床に表現療法を定着させた日本遊戯療法学会の会長でもある山中康裕は、特に「遊戯療法」(山中2001)や「遊戯療法の根本問題」(山中1999)で次のように述べている。

Play Therapy を遊戯療法と訳されたために、少なくとも2つの誤解を招いてしまった。そのために1、遊戯療法は子どもと楽しく遊べばいいと思われてしまった。しかし、『遊戯療法』は、断じて「お遊び」「お遊戯」などではない。

2、「クライアントというものは、われわれのところに連れられてくる以上、何らかの症状や問題行動をもっている。その症状や問題行動を生じさせるこれまでの生活史の中で、幾多のつらさや理不尽ながまんやら不安や苦悩やらを強いられてきた過去があったはずだ。そうであれば、遊戯療法のセッションにおいてクライアント自身が、無性に腹がたったり、怒りがこみ上げてきたりというような、アグレッションが表出されてきて、当然そうした感情が排出されてくることとなる。(時にはその攻撃の表出はセラピストにもむけられる。)遊戯療法とは、一言で言えば、子どもの自己表現を最大限に受け入れる器を提供するものなのである。」(山中2001)このことが、「守りの薄い子どもたち」にとって是非必要なことである。(山中1999)

Ⅲ. 遊戯療法のスーパービジョンで直面した問題について

ここでは、筆者が実際に、出会ったケースカンファレンスやスーパービジョンあるいは、院生から直接受けた質問からはじめよう。遊戯療法セッションの始まりの時、セラピストはどのような態度でクライアントに臨めばよいか、セラピストの役割、その終わり方などについて述べたい。

(1) 遊戯療法はどのようにして始まるか。

子ども（クライアント）が待っている待合室までセラピストが行く。母子併行面接を行うときには、母親担当者と共に行く。母親担当者がもうすでにクライアントの母親と顔見知りのときは、母親担当者がプレイセラピストを、母親とクライアントに紹介する。プレイセラピストはここで、母親と子ども（クライアント）に、自己紹介をし、子どもには遊戯室に誘う。母親から、すんなり別れてプレイルームに入れる子ども、つまり母子分離がスムーズに出来る子と出来ない子どもがいる。出来ない子どもの場合、もし母親が、プレイルームまで送ってくれば、入ることが出来るかもしれない。あるいは待合室から、ただ見送ってくれるだけで、安心して入室できる子どももいる。この時、セラピストは、子どもが保護者から一人はなれて、今初めて紹介されたばかりのセラピストとたった2人で、遊戯室に入ってくる子どもの勇気を認めてあげたい。そして、「この部屋では50分の時間がくるまで、どんな遊びをしてもいいし、あなたの好きなことをして過ごしたらいいよ」と言う。相談室に連れて来られるようになる子どもは、おそらくこれまでに、「あなたの好きなことをここで何でもしていいよ」なんてことを、今まで言われた経験など持ち合わせていないのではないか。ある子どもは、今まで禁止の言葉ばかりを聞かされてきたであろう。だから、そのようなことばを聞いたこともなかったので、セラピストの言葉をすぐに信じられないかもしれない。しかしここでセラピストの真摯な態度によって、子どもがセラピストを信じる事が出来、自由に自分を表現できるようになっていくようにセラピストは、子どもの信頼を得なければならない。子どもは、そこ（プレイルーム）に足を踏み入れると何か「ホッと！」できる雰囲気漂っていて、「アー、今日ここに来てよかった！」と思えるような空気が醸し出されていることが大切である。

(2) セラピストはどのような態度で子どもに臨べばよいか。

実際に、クライアントとして子どもを迎えるとき、セラピストとしてはどのようにすればいいのだろうか。これについては、アックスラインが、セラピス

トのとるべき態度として8つの基本原則を提示している (Axline1947) チャイルドセントラードセラピーの基礎となるこの原理が提唱されて60年余になるが、現在も派を超えて、セラピストの態度の基礎となり我が国でも、海外 (Schaefer2003) でも尊重され、強調されている。それらは、

- 1 良い治療関係 (rapport) を成立させる。
- 2 あるがままの受容 (acceptance) を行う。
- 3 許容的雰囲気 (feeling of permissiveness) を作る。
- 4 適切な情緒的反射 (emotional reflections) を行う。
- 5 子どもに自信と責任をもたせる。
- 6 非支持的態度をとり、治療者は子どもの後に従う。
- 7 治療はゆっくり進む過程であるから、じっくり待つ。
- 8 治療者は必要な制限 (limitation) を与える。(村瀬訳1996c)

セラピストは上記の8原則を肝に銘じ、自分の身につけておくべきである。

(3) セラピストの役割について

ランドレスは、プレイセラピストの役割という項で次のように述べている。(Landreth, 1991b), プレイセラピストは、特別な話題や活動を子どもに指示したり、導いたりしなくて良い。セラピストは子どもがすることに満足してついてゆけばよい。大切なことは、セラピストの智ではなく、子どもの智であり、セラピストの指揮ではなく、子どもの指揮なのである。セラピストが問題解決するのでなく、子どもが自分で何か良い方法を発見し考え出していくのである。それには、子どもが自由に自分自身になれるように、子どものすべてを受け入れてもらえる環境が必要となってくる。

セラピストはその子ども (クライアント) のスーパーバイザーでもないし、先生、友達、ベビーシッターでもない、ましてや両親の代わりでもない。では、セラピストは子どもにとってどのような存在でいるとよいのだろうか? Axline が、有名な Dibs を通して答えている。Dibs 「あなたはお母さんではない。あ

あなたは先生でもない。あなたはお母さんのブリッジクラブ（トランプ仲間）でもない。あなたはなになの？そんなことはどっちでもいいの。あなたはこの素晴らしいプレイルームの人（レデイ）なのです。」子どもは自分のセラピストに、いつも何でも自分に好きなことを自由にさせてくれる、そんな素敵な部屋で私をいつもきちんと待っていてくれるそんな部屋のすてきな人を期待している。（Axline, V. M. 1964）

(4) 遊戯療法の中で起きること

遊戯療法のセッションの中ではいろいろなことがおきる。

セッションが始まってしばらくすると、退行遊びになることがある。これまで自分で出来ていたことが出来なくなったり、実際に遊びの中で哺乳瓶を吸ったり、砂や水でまとまりのない感触遊びのレベルにまでなる場合もある。このような遊びに対して、弘中は、「子どものなかにある甘えの願望の表現」として捕らえればよいことを指摘している。「子どもは安心して甘えられる状況（乳児の段階）へ心理的に立ち返ることによって自我の安定の基礎を確認しようとする」また「より広い意味では、健康な退行は自我の再生の一段階とみなされる」し、「十分に退行し、建設的・創造的な方向でその成長を開始する。それは、飛躍をするためには、身をかがめる動作に似ている。」（弘中2002）という。セラピストはこのような子どもの特徴を心得ておく必要がある。

- ・子どもの視線に立つ・・・セラピストでなくても、保育や幼児教育に携わるものにとって、大人が子どもの視線に立つということは、全くの常識である。子どもの目の高さを考慮せずにプレイすることは、子どもを見ないでプレイするに等しい。大人がただそこに立つだけで子どもに脅威さえ抱かせることになるので、セラピストは、この点についてもこころすべきである。たとえば、身長178センチメートルの男性のセラピストが、身100センチメートルの子供のセラピーに当たる場合、そのセラピストは、座るなどして常に子ども（クライアント）の視線の高さで、子どもとの遊びに携わ

る必要がある。その子が、セラピストと一緒にいる空間をいつも『自由に保護された空間』(Kalff1966, 河合監修1972)であると感じ、そのように振舞えるような雰囲気をかもし出すようにする必要がある。ここで子どもが自由に自己表現するには、箱庭療法をする時と同様な雰囲気が必要であることも理解できる。

- 枠を超えること・・・遊戯療法においては、時・場所・空間の枠をもつ。ところが子どもの遊びにおいてはこの枠を超えて遊ぶという現象がしばしば起きる。この点に関しては、いろいろ個別に検討する必要がある。その際に考えなければならないことは、その意味についてである。その時、枠を超えるということが、その子どもにとってどのような意味を持っているのかについて、よく考えなければならない。その意味をセラピストがどのように受け止めるかによって、そのプレイセラピイの行方がわかるといえるほどである。

- 制限の意味：

「制限はほとんどありませんが、たとえあったにしても、それはかえって安定感と現実感をますものです」と、村瀬(2000)は、制限の必要性について述べている。遊戯療法における制限の必要性については、多くのセラピストに指摘されている。このことから読みとれるように、遊戯療法において、時・場・空間の枠を設定することは、単なる制限をしているわけではない。その制限が強くされすぎると、子どもの自由な表現が保障されず、遊戯療法の本来の意味が軽減されてしまう。制限をどこに設定するかは、それぞれのセラピストにかかっている。

- 子どもは自分のおもちゃをプレイルームに持って入りたがる。これについて、セラピストとしては、クライアントのおもちゃの持参は許すべきでないということを知っておくべきである。ここで肝心なことは、その原則を知っているにもかかわらず、そのセッションでは、クライアントにとっておもちゃを持って入ることが、治療的に意味があるとセラピストが判断した時のみ、もって入ることに同意する。

(5) 遊戯療法はどのようにして終わるのか？

1) 各セッションの終わりについて

遊戯療法では時・場所・空間の枠は必要であり、枠の中では完全に保護されているので、子どもが安心して心いくまで遊ぶことが出来、自分を表出することができる。子どもは、特に、終わりのときを守ることが難しくなる。枠を超えて（時間を延長して）遊びたくなる。セラピストは、この枠を超えないために、セッションの数分まえになると、もうすぐ終わりであることを子どもに予告する。例えば、「あと5分でもう終わりだよ。」とか、「そろそろ終わりに近づいているが、後まだ5分あるよ。」という具合に。それでも子どもは、時を越えて、遊びたくなる。これは退出しぶりといわれるものであるが、なぜ退出渋りになるかについてはよく検討すべきである。

同時に、この時、もっと遊びたく思うクライアントの気持ちがよくわかるが、それが許されないことを伝えなければならない。

次に、各セッションの終わりによく見られるのは、子どもが、そのセッション中に遊んだおもちゃを持って帰りたいという場合である。この場合にも、その子がこのおもちゃが気に入って、おうちにまで持って帰りたいという気持ちは、よくわかるが、ここではそれはできないことになっていることをセラピストははっきりと告げなければいけない。そして同時に、セラピストは、来週もそのおもちゃとともに、ここでちゃんと待っているからと、両者の関係性の中で信頼関係が樹立していることを告げるのもよい。

いずれの場合においても、次回を楽しみにしている。例えば、「来週待てるよ」「また来週ね」とか簡単な言葉でよいと思うが、クライアントが「今日ここに来てよかった！次もまた来てみたい！」とクライアントのこころのなかからエネルギーが湧いてくるようなかたちでそのセッションが終われるとよいと思う。

2) 遊戯療法全体の終わり（終結）について

遊戯療法全体が終わるときについては、次の3つの場合が考えられる。

1. ある遊戯療法過程が終わり、主訴であった子どもの症状も解消され、子

どもが最初楽しみにしていた相談室のプレイルームでの遊びより、外の、例えば、クラスメートとの遊びの方が大切になったとき、すなわち子どもの社会適応が可能になったとき子どもの方から、そのことを伝えることがある。このような場合にも、子どもとセラピストとの人間関係がしっかりと確立していれば、級友と一緒に遊びたくなったクライアントのことをともに喜び合い、めでたく終結に持っていくことができる。

2. まだ終結に至っていないが、次子が生まれる、家族で遠方に引っ越すなど物理的に別離が来るなどその子の気持ちと関係なく、その面接を終えなければならないときがある。そのような時にもそのクライアントを尊重し、2人で培ってきた人間関係を大切にしながら、そのセッションを閉じなければならない。

3. 次は、セラピスト側の理由、退職・転勤などで終えなければならないときがある。このような場合、クライアントが子どもであるからといって、自分のクライアントを超えて、その親や学校に先に連絡などしないことである。当事者はクライアント＝子どもであるので、その本人にまず事情を話し、了解・了承を得た上で、二人の信頼関係を壊さないような終わり方をするのが望ましい。どこかにリファーする場合にも、同じことが言える。

どのような終わり方をして、もし必要になれば、いつでも連絡してもよいということをつけ加えることもよい。セラピスト側が心すべきことは、どのケースにおいても、その「治療過程は、個別的な創造過程」であるので、治療者はその子どもの問題の性質や状態像に応じたかかわり方が求められるということである。

IV. 遊戯療法におけるスーパービジョン

(1) スーパービジョンについて

スーパービジョンは、臨床心理士になるための訓練として是非受けておくべきものである。そこで、訓練を受けたいと思う学生達はどのように自分のスーパーバイザーを選べばいいのだろうか。わが国において、スーパーバイザーに

なるための資格など決められているのだろうか。またその人達の名簿など存在するのだろうか。スーパービジョンについて論じた書籍も少ないし、遊戯療法におけるスーパービジョンについての良書が待たれるところである。

実際、臨床心理士第一種指定校においても、その訓練において、最初に担当するのが、遊戯療法である。クライアントが子どもだから安易であるというわけでもなく、遊戯療法だから子どもとただ楽しく遊んでいたらよいというわけでもない。学生が臨床心理士（大学院生でまだ資格も取っていない）としてはじめてする臨床活動に対して、遊戯療法の実際について理論的な知識のみでなく、遊戯療法を実践的に体験できる環境づくりが必要である。

筆者が遊戯療法について学び始めた頃は、訓練を受けようとする院生たちは、プレイルームの隣の部屋に、待機し、マジックミラー（それは誠に粗末なものであったが）をとおして、先生や、先輩たちが、すぐ目の前で繰り広げるプレイセラピーセッションをかたずを飲んで、緊張しながら、おそらく今、隣室で実際にセラピーを行っているセラピストとおなじくらい、あるいはそれ以上のエネルギーを費やして、見守ったものである。

その後、アメリカに留学しメローパーマー研究所においても、コロンビア大学で、アックスラインのもとで遊戯療法を学んだという Dr. ムスターカスの、プレイセラピーのセッションを、毎週マジックミラーを通して、体験したその鼓動を今も鮮明に思い起こすことができる。筆者は、Dr. ムスターカスと子ども（クライアント）とのセッションを隣室からマジックミラーを通して、ただ見ているだけ（表面上、あるいは外見上）なのだけれども、そのセッションがタイムアップとなり、その子どもがプレイルームから退出する頃には、観察していた筆者まで、心が癒されたのか、こころが軽く楽しい気分になった。ちょっと大げさに言えば、希望に満ち溢れて、生き生きとした状態になって、観察室から出てくるのがしばしばであった。これは河合のいう事例研究で、その発表を聴いている人が、その人の無意識が動かされていくのと、同様のことがこの観察室でもおきていたのではないかと思われる。

しかしながら、昨今では、人権の重視という視点より、マジックミラーや観

寮室は使用しないという大学も多いと聞く。それならビデオ撮影ならいいのかという疑問もわいてくる。とにかく私たちは、生きている一人の人格を持った尊厳ある人間とかかわる仕事をしているということを常に心に銘記し、学生を訓練するスーパービジョンについても、慎重によく考えて行われなければならない。

1) スーパーバイザーとバイザーの関係

次に筆者が遊戯療法について、直接学んだと思われる先生方の著書を通して、スーパービジョンについて述べておられる箇所を、筆者の思い出すままにとりあげてみたい。

ムスターカスは、アックスラインの提唱した遊戯療法を発展させ、多くの著書を記した。彼が、スーパービジョンについて語っている一部を筆者なりに拾ってみよう。

- 1 スーパーバイザーとスーパーバイザーは、真の人間関係を持っていなければならない。スーパーバイザーは、バイザーを鋳型にはめたり、行動を支持したり、その妥当性を信じ込ませたりするのではなくセラピー過程を理解するための哲学的基盤（真髓）を提示するようなやり方で、バイザーがセラピストとして自己成長する過程を見守るのである。しかし、そのバイザーが、プレイセラピストとして、セラピーの理論や概念およびその基盤を自分自身で深め、発展させていくかどうかは、バイザーのもつセラピーへの哲学的原理（治療観）のへのオリエンテーションによって、かなり左右される。
- 2 子どものセラピーの理論を習得したバイザーには、つぎに、いろいろな年齢・生活環境にある正常児・情緒障害児など心理的な問題を持つ子どもと触れる機会を提供し、バイザーが子どもと接して観察してきたことを自由に自発的にバイザーと話し合う機会を持つ。
- 3 バイザーがもつケースについて、原則として毎週1回話し合う。ケースを担当する時期は、バイザーが、自分で決める。自分はまだケースを持って大丈夫であるという心の準備ができた時、そのことをバイザーに告げる。バ

バイザーは、セラピーセッションのなかで、どのように子どもに近づき、どんな言葉かけをし、どのような関係をもつかなどを教えるのが目的ではない。子どもとの有意義な治療関係を作り出すという中心的基盤について話し合うのが目的である。バイザーは自分の洞察と失敗を通してセラピーの真髓を感じとり、そのことをバイザーと自由に話し合いを重ねることによりセラピストとしての研鑽を積んでいく。

- 4 スーパーバイザーは、評価的でない態度を保持して、学生が自分で決定し、自分自身の評価と結論に達することを見守ってあげる。このようなスーパーバイザーの支持と励ましや学生自身のやる気（自覚的探求心）を通して、バイザーは、成長していく。スーパーバイザーは自分にバイズを受けている学生が、子どものセラピストとして成長していくのをいつも関心を持って見守っているのである。スーパーバイザーは、学生がセラピーセッションでもった体験の報告を受け、ともに分かち合いながら、また一人の人間としての学生を尊敬し、尊重していることを伝えながらその体験に参加するのである。ここでは、スーパーバイザーもまた一人の学習者であることを忘れてはいけない。クライアント・セラピストという治療関係はすべて、ユニークであり、その一回一回に、バイザーとバイザーが真摯に向き合い固有の発見を重ねていくことが求められる。バイザーは学生に心を開き、基本的に新しい理解に努めることにより、それぞれのユニークな治療関係を築き、その治療過程を理解していくことができるのである。(Moustakas1959, 古屋健治訳編1968)

(2) マニュアル化できないスーパービジョン

スーパービジョンについて、河合(2001)は次のように言っている。

スーパービジョンは、臨床心理士の訓練・研修の中核にある。スーパービジョンとは、「管理」でもないし、「指導」でもない。そのような面も持っているが、それ以上のものである。臨床心理士の仕事は一つ一つがユニークであり、マニュアル化できない。マニュアル化できないものを監督・管理もむずかしい。クライアントも、バイザーもバイザーも事例もすべて各々異なっている。この一回

限りの事象に対して最適なことを考えなければならない。一回一回が勝負である。さらに続いて、スーパーバイザーの役割として、スーパーバイザーを育てることが大切である。スーパーバイザーは、自分の考えや方法を押し付けるのではなく、バイザーの発見や成長を助けるのである。

(3) スーパービジョンのあり方

最後に、スーパービジョンをめぐる、村瀬と青木は次のような対談をしているのが興味深い。

精神療法、心理療法をめぐる、自分を客観視したり、相対化したりするためのスーパービジョンは重要である。スーパービジョンには、どうも2つの方法があるようである。ひとつは、横に水平に視点を広げていくような、いろいろな考え方を聞くことでその人の視野を広げていくようなスーパービジョン。もうひとつは、上から下に指導していくようなスーパービジョン。後者は、上の人の考えを取り入れざるを得なくなったり、一種の刷り込みみたいになったりして危険な側面がある。縦のスーパービジョンを受けている人の感じというのは、患者・クライアント関係も縦の関係になって、支配・被支配みたいな関係になりやすいように思われる。(青木2004)

上質なスーパーバイザーとは、全体状況に対する「ものすごい想像力でもって、「スーパーバイザーが発見する「ちょっとしたヒントを出す」ことができるバイザーである。バイザーの話聞くことによって、ある見え方、理解の仕方が、もっと幅と深さをもってよくわかるし、あっ、そういうことなのかというふうに、理解が的確になる。次にどう振舞うかを教示してくれるより、バイザーのちょっとしたヒントによって、自分のクライアントの問題や背景が見えてきて、自分の中から生じてくる力で解決していけるというセルフエスチーム(自尊心)が高まるような援助をするバイザーが望ましい。(村瀬2004)

上記、巨匠らのスーパービジョンに関する見解は私たちに多大な示唆を与えるものである。

遊戯療法におけるスーパービジョンについて、このように考えてくると、スー

パーバイザーとバイジーの関係と、セラピストとクライアント関係には、同様の働きがあることがわかる。理想的なスーパービジョンとは、バイザーがバイジーを尊重して見守りながら、それとなくバイジーのセルフエステームが高まるような援助をすることである。このことは、セラピスト・クライアント関係においても同じことが言える。これは、期せずして、Axlineが、プレイセラピーの副題を「問題児が自分で自分に援助する方法である」とした点と一致している。

おわりに

遊戯療法におけるスーパービジョンについて、遊戯療法の意味やその本質について自分の体験を通して考えてみた。臨床心理士を養成すべき大学院における遊戯療法と事例研究のスーパービジョンにあたる時、先に述べた巨匠らのスーパービジョンのあり方を真摯に受け止め、今後とも地道に研鑽を積んでいきたい。

文献

- Axline V.M. (1974a) Play Therapy: The Random House Publishing Group.9-11
(1974b) 73-85
- 小林治夫訳 (1972a) 遊戯療法.岩崎学術出版社. 11, (1972b) 95-184
- Axline, V. M. (1964) Dibs In Search of Self New York Ballantine. 204
- 弘中正美 (2002) 遊戯療法と子どもの心的世界, 金剛出版 38-39,
- Kalff, D. M. (1966): Sandspiel, Zurich: Rascher. 山中康裕他訳 (1972) カルフ箱庭療法,
誠信書房
- 河合隼雄 (1969) 箱庭療法入門 誠信書房
- 河合隼雄 (1986) 心理療法論考, 新曜社 163-171
- 河合隼雄 (2001) 鑪幹八郎・滝口俊子, スーパービジョンを考える 誠信書房. 1-3
- Landreth, G.L. (1991a) Play Therapy - The Art of the Relationship— Accelerated Development: Development of Play Therapist 25
(1991b) Role of the Play Therapist98

- Moustakas, C. E. (1959): Psychotherapy with Children~The Living Relationship~
Haper & Row, Publishers: "Supervision" of Students in Child Therapy. 306-318
- 古屋健治訳 (1968) 児童の心理療法～遊戯療法を中心として～. 岩崎学術出版社375-391
- 村瀬嘉代子 (1996a) 子どもの心に出会うときー心理療法の背景と技法；プレイセラピ
ストに求められるもの～現実と非現実の中間領域を生きるために～金剛出版23-35.
(1996b) 遊戯療法の理論と実際 金剛出版61-90
(1996c) 遊戯療法の理論と実際 金剛出版64-65
- 村瀬嘉代子 (2000) 心理療法の基本ー日常臨床のための提言ー金剛出版 14
- 村瀬嘉代子 (2001) 子どもと家族への統合的心理療法 金剛出版 9-23
- 村瀬嘉代子 (2003) 統合的心理療法の考え方ー心理療法の基礎となるものー 金剛出版,
135
- 村瀬嘉代子・青木省三 (2004) 心理療法とは何かー生きられた時間を求めて. 金剛出版.
62-67
- 酒井敦子 (2005) カウンセリングで思うと・考えること・話すこと. 奈良教育大学保健
管理センターNo.45
- Sweeney & Landreth. Child-Centered Play Therapy (2003) Foundtions of Play Ther-
apy Schaefer, C.H. John Wiley & Sons, Inc. 76-98
- 山中康裕 (2001) 遊戯療法, 精神科治療学 Vol.16. 星和書店45-50
- 山中康裕 (1999) 『遊戯療法の根本問題』遊戯療法, 現代のエスプリ, No389, 至文堂183
-195
- 吉田弘道・伊藤研一 (1997) 遊戯療法ー2つのアプローチー, サイエンス社,

ABSTRACT

This article discusses the role of supervision in play therapy and includes the following points: the meaning of play therapy, the role of the therapist, what occurs in the relationship between client and therapist, and what the client communicates to the therapist, in each session, through his/her play. In addition, the author describes the course of her own training to be a play therapist through presenting her experiences with her supervisors.

The essential element of play therapy is that the relationship between the therapist and supervisor is not substantially different from the relationship between the client and the therapist. Axline's defining words are so true: "Play Therapy: a method of helping problem children help themselves."

Key words: play therapy, role of the play therapist, supervision